

「協働状況アセスメントシート」による学校支援可視化の検討 —校種による比較から—

荊木まき子（就実短期大学）

キーワード：協働状況アセスメントシート，学校全体の支援検討，教職大学院教育

問題と目的

近年、「チームとしての学校（文部科学省，2015）」が提唱され，学校組織全体で児童生徒の支援に取り組むことが明文化されている。これらの答申を受け，養成教育や教職大学院等の教育相談・特別支援教育の教職大学院において，「チームとしての学校」を学習する試みは始まったところである（荊木・森田・鈴木，2015）。現在，学校組織全体を診る指標として，学校経営を診断する「学校経営診断カード（松田，2013）」等は存在するが，学校全体の支援を俯瞰して評価するアセスメントシートはほとんど見られない。今後学校現場や養成教育，教職大学院等で，学校全体の支援の検討や観点を学習するにあたり，学校組織全体の支援を可視化する評価シートは重要になると考えられる。そのため本研究では，教職大学院の講義内において「協働状況アセスメントシート（Ibaraki・Edahiro，2018）」を活用し，各学校教員の記入により，学校全体の支援を評価・把握し，学校支援のアセスメント・教材活用の可能性を検討した。

方 法

協働状況アセスメントシート

項目として，学校の全体と学校内の各取り組み項目（3項目），全体として見たときの観点（5項目）を記入し，学校全体としての支援組織の特徴や改善点（3項目）を考えてもらった。

調査協力者

教職大学院に在籍する教員11名（小学校5名，中学校3名，特別支援学校3名：教職経験がない学生は，学校経験を充分に書くことが難しく，高等学校教員は1名であったため除外した）。

調査時期 2018年10月・2019年1月

調査・分析方法

調査は，教職大学院の講義に「協働状況アセスメントシート」を記入し，勤務校の支援状況を考えてもらった。後に各校の状況発表を依頼した。

分析は，記入物をSCAT（大谷，2007）による分析を行い，各校種の特徴を比較した。

倫理的配慮として，口頭での本研究の目的，記入物をデータに使用することを説明し，同意を得た。

結 果

各項目の校種別に見られた特徴として，学校の全体と学校内の各取り組み項目では，校種毎に児童生徒の発達段階・特徴に応じた全体目標を立案し，それに沿って指導の基準や課題が見いだされていた。それらを支える組織構造として，1次支援は学習支援や自立活動，行事を中心に，2・3次支援は管理職・生徒指導・特別支援の担当者と共にSCやSSWを配置し，支援体制を構築していた。

実際の行動では，小学校では行事や研究授業での1次支援，中学校では2・3次支援を担当が担うこと，特別支援学校では1～3次支援とも全体的な配慮や個別対応等総合的支援を必要とする特徴が見られた。

全体として見たときの観点や支援組織の特徴や改善点では，小学校では学校内の組織化の程度により主任層が多重役割となること，中学校では学校内の重点項目の達成により，他項目の支援が不足すること，特別支援学校では分掌の多さから，児童生徒個人の支援の全体像が共有化されていない等が見られた。

記入後の意見として，校内の優先順位や，学校を構造的に見る視点をもらったこと，学校全体を見通せていないことが理解できた等が見られた。

考 察

結果より，「協働状況アセスメントシート」は各校種の特徴を示すと考えられ，学校現場や教職大学院での学校支援を可視化するアセスメントや，教材として活用できる可能性が考えられた。

本研究の限界として，本シートが実際の学校経験をもとに記入するため，学校全体がある程度見えているミドルリーダー層以上でなければ，記入が難しい面があり，教職経験が浅い・ない教員や学生への対応を今後考えていく必要がある。また，今後より多くの事例を収集し，本シートの汎用性をより高める必要性があると考えられた。